



『ご近所でよかった』 頼れるメビウスの帯

鹿児島県森林組合連合会
参事 駿河 理博

平成13年9月、鹿児島県森林組合連合会隼人木材加工センターはスギ中小断面集成材の製造販売を開始しました。

森林面積65,649haを有する始良流域の森林蓄積を背景にスギ中目小曲り材（通称：中目B材）の有効需要対策の一翼を担い、華々しく需要拡大への離陸を果たす筈。バックボーンとしては、工業技術センター木材工業部において、平成10年から11年にかけて研究が続けられた「スギ中小断面集成材の製造システムの確立と実用化」の研究提言がありました。

平成12年の住宅の品質確保促進法の施行もあり、各要素が絡み合った事業の具現化であり、まさに追い風に乗った新規の木材加工分野への進出であった筈でした。

加工担当部署はプログラムどおりに完成品の直前段階であるプレス前までの工程を終え、営業の発注を待ちました。慣れない工程で工場内部はトラブルの連続で悪戦苦闘しながら、日々が過ぎ去っていき、数週間が経過しました。

その後、計画段階で販売先として見込んでいた数社からの回答に愕然としました。「JAS認定工場ですか？JASを取得されてから話をしましょうか」どの販売先からも同様の旨の応えでした。

折しもユーロは90円台。計画予定価格と流通する安い欧州産の集成材との価格差は約30,000円/m³と大きく開いていました。営業先での「それ位の生産量ならマニアックな市場で生きて行かれば・・・」との有難いアドバイス(?)がうら悲しい響きで耳に残りました。

早々、工技センターに相談に行きJAS工場認定に向けての指導を受けることになりました。丸太と未乾燥の製材品しか知らない本会のスタッフにとって計数的に木材を捉えることは丸太の専門家を自負していたことが恥ずかしくもある事象の連続だったことでしょう。

翌平成14年3月の工業技術センター発行の『スギ集成材試験体の成績表』が、平成15年1月のJAS認定証獲得までの営業の必須アイテムでした。その間の木材工業部のご指導には本当に感謝申し上げます。

隼人木材加工センターのその後を語るうえで、

工業技術センターによるご指導のもと、各種の試験を実施し、住宅メーカーへそのデータを提出し続けた事が一番の営業戦略だったと言えます。

さて、工場操業も丸6年が経過し、当初のスタッフも半数近くが入れ替わり、収支の状況もいまひとつの状態ではなかなか、大きく離陸できない状況です。

しかしながら、本年は初期段階からの懸案であった工程の見直しを主眼に置いた増設も実施でき、歩留まりの向上が図れている事と、中国木材をはじめ幾つかの大手の外材主体の企業が、スギを使用した中小断面の集成材製造分野へ進出した事は、漸くスギ集成材の市場が拡大し、希望が持てそうな世の中になってきたと感じています。

大口の需要先の破綻もありましたが、工業技術センターと共に取組んできた各種のデータは、最終需要先である住宅メーカーのハートをしっかりと掴んでいるのか、住宅メーカーからの材料指定で私共の集成材が活かされていることは、大変有難いことです。

「ご近所でよかった。」と今でも大変心強く、幸運に感じています。

同時期に全国で始動した国産材利用の集成材加工場が軒並み厳しい状況を余儀なくされている現状を考えると、集成材製造の規模は超大型でなければ成り立たないのかもしれない。

しかしながら、需要先への小まめな対応と住宅に使用する木材全般のアドバイスが出来る『街角コンビニ集成材工場』もどっこい生きて行けるのではと、近頃思い始めました。

数年前の「マニアックな市場で生きて行かれば・・・」とのアドバイスが、「本当にそうですね。」と素直に納得して、有難い響きで思い出されます。

現在は林務行政にいる数人の元工業技術センター勤務だった方々と懐かしそうに談笑する本会の中堅職員を見ていると、数年後、また同じメンバーで木材の何か新たな分野での試験研究や実用化が一緒に出来ればいいなあ。と心密かに思っています。

今後ともよろしくご指導の程お願い申し上げます。